

2022年度  
入学試験問題  
( B 日程 )

国 語

注 意

- 1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 「開始」の合図で、1/5から5/5まで問題が印刷されていることを確かめなさい。
- 3 解答用紙に受験番号を書きなさい。名前を書いてはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙の指定された解答らん<sup>らん</sup>に書きなさい。問題用紙に書いても得点になりません。
- 5 解答用紙はこの表紙の裏にあります。
- 6 「終了」<sup>しゅうりょう</sup>の合図で、すぐに筆記用具を置きなさい。
- 7 問題および解答用紙は机の上に置き、持ち帰ってはいけません。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

病気で母を亡くした小学四年生のフミは、父親の再婚で新しい母と姉（マキ）ができた。ある日、新しい母の妹（響子さん）の出産に駆けつけた後、帰り道の途中で母と海岸を眺めていた。

「赤ちゃんが産まれたのって、一時過ぎだったよね。あとで帰ったら、満潮がいつだったか調べてみようか」「そんなの関係あるの?」

「うん。どこまで科学的に正しいのかは知らないけど、潮の満ち引きと人間の命が深いところであつてつながっているという学者さん、けっこう多いのよ」

赤ちゃんが産まれるのは満ち潮のときで、ひとが亡くなるのは引き潮のとき――。

「あとね、人間の血って、しょっぱいでしょ。あれも海と関係あるっていう学者さんが多いのよ。ほら、人間ももともとは海の中にいたわけだから、遠い祖先さまが陸に上がったときにも、体の中に海が閉じ込められてたんじゃないか、って」

だから、とお母さんはフミを指差して、つぶけた。

「フミちゃんの体の中にも、小さな海が入ってるのかもね」

フミは思わず自分の胸に手をあてた。ときどきする。磯に打ち寄せる潮騒のリズムは、不思議と耳に心地よく響く。見わたす海の眺めも、初めて来た海岸なのに、なぜか懐かしい。海水浴に出かけると、よくそう思う。初めての海水浴場でも、前にも来たことがあるような気がしてしかたない。プールではそんなことは全然ないのに。

「涙もしよっぱいでしょ」

「うん……」

①「泣いちゃうときっていうのは、体の中の海が満ち潮になつてることなのかもね」

わかる。ほんとうにそうかもしれない。胸に熱いものが込み上げるのは、確かに潮が満ちてくる感じに似ている。

お母さんは沖のほうを眺めて、大きく深呼吸をした。いや、あくびだった。ほとんど徹夜の睡眠不足だ。フミやマキは車の中で眠っていたらいいけれど――。

「お母さん、だいじょうぶ?」

するっと声が出た。あまりにもなめらかすぎて、言ったフミも言われたお母さんも最初は聞き逃してしまったほどだった。

お母さんは目をしょぼつかせて「平気平気」と応え、ワントempoおいてから、「え?」と驚いた顔でフミを見た。フミもそれで気づいて、口をぼかんと開けた。

いま、言った。ずっと言えなかった言葉が、こんなにもあっさりと、簡単に。

そして、どうして今まであれほど a していたんだろうと笑ってしまうほど、言葉はくちびるにすんなり馴染んでいく。

「お母さん、眠くなったらいつでも休んでいいからね、っていうか、居眠り運転しちゃだめだよ、もしアレだったらコンビニに寄って、缶コーヒーとか買ってきてあげるし……」

口にした「お母さん」はたった二回でも、もうだいじょうぶだと思った。

お母さんも「ありがと」と少し照れくさそうに言って、もっと照れくさそうにつづけた。

「いろんなこと始まったね、いま」

フミの体の中に閉じ込められた小さな海は、ちょうど潮が満ちていたのかもしれない。赤ちゃんが産まれるのと同じように、フミとお母さんの新しい生活も、満ち潮のタイミングで始まるのかもしれない。そうだ。絶対にそう。その証拠に、満ち潮は、フミの胸からあふれそうになっている。

ヒロミちゃんの産まれた夏の終わりのあの日は、だから、フミにとっても大切な誕生日になったのだ。

「じゃあ、そろそろ帰ろうか」

響子さんは帰りたくを始めた。

ひさしぶりに会ったケンちゃんは、最初から最後まではにかんでしまつて、フミとはほとんど話さなかった。仲良くなったと思つていたのはフミだけで、ケンちゃんのほうはべつになんとも思つていなかったのかもしれない。

でも、フミにはどうしても伝えておきたいことがある。

あの日、あのままになつていたケンちゃんの質問に、いまなら答えられる。

ヒロミちゃんをキルトのおむつ替えシートの上に寝かせた響子さんは、カバーオールのお尻のボタンをはずしながら、「荷物を先に車に載せといてくれる?」とケンちゃんに言った。

ケンちゃんは面倒くさそうな生返事をするだけだったが、フミは「あ、じゃあ、わたしも手伝う」と、哺乳びんや紙おむつの入ったトートバッグを肩に掛けた。

「ケンちゃん、一緒に来てよ」

断られるのも覚悟して言うと、ケンちゃんは意外とあっさり、むしろそのタイミングを待っていたようにならずいた。

外に出て、夕暮れの肌寒さに身震いしながら、「ねえ」とケンちゃんに声をかけた。

「夏休みに、わたし、ケンちゃんから質問されたことがあるんだけど……覚えてる?」

ケンちゃんは黙つてうなずいた。まるで叱られているような、しよげかえつたしぐさだった。

「どうしたの?」

「……オレのこと怒ってるでしょ、フミちゃん」

聞き返す前に、ケンちゃんは「ごめんなさい」と頭をべこりと下げた。「ほんと、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」きよとんとしていたフミの顔は、やがて笑顔に変わった。困惑が安堵になった。よかった。だいじょうぶだった。もうケンちゃんは自分で、正しい答えを見つけたのだから。

フミはうなずいて、言った。

「わたし、どっちも好きだよ。お母さん二人いて、どっちも、大、大、大好き」



問六 ——線部④「まるで叱しかられていてるような、しよげかえったしぐさだった」とありますが、ケンちゃんがこのようなしぐさをとつた理由を説明したものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア フミと二人になる機会を待っていたが、うまく謝あやまれるか自信がなかったから。
- イ フミにした質問に対して、その意図を説明することができるか不安だったから。
- ウ フミの口調が強く、自分が考えているよりも怒おこっていると感じとっていたから。
- エ フミに失礼なことを言ったので、気を悪くしているだろうと気にしていたから。

問七 〰線部 X・Y「だいじようぶ」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

- (1) Xはフミが自分に対して感じた思いで、Yはフミがケンちゃんに対して感じた思いですが、二つに共通しているのはどのような点ですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。
- ア 他の人と相談していたが、フミが中心となって考えるようになった点。
- イ 一人で考え始めたものの、他の人とも協力せざるをえなくなった点。
- ウ どうしたらよいか一人で悩みながら、自分で解決することができた点。
- エ 一人で悩む姿を見かねて、家族が手を貸してくれるようになった点。

(2) ケンちゃんに話しかけてから、〰線部 Y「だいじようぶ」と思うまでのフミの気持ちの移り変わりを並べたものとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 覚悟かくとー心配ーとまどいー不安
- イ 覚悟ーおどろきーとまどいー安心
- ウ 覚悟ー心配ー疑いー安心
- エ 覚悟ーおどろきー疑いー不安

問八 ——線部⑤「答え合わせをして、二人とも満点だったのだろう」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア お互あひたいに出し合った質問だったが、正しいと思える答えに同時にたどり着くことができたということ。
- イ それぞれが自分でたどり着いた答えであったが、納得のいくものを見つけたことができたということ。
- ウ 一人ずつでは何か足りない気がしたが、二人の答えを合わせると満足のいくものになったということ。
- エ 二人とも自分の答えに自信があったが、相手の答えを聞いてさらにその思いが強くなったということ。

問九 ——線部⑥「心配することなかったでしょ？」とありますが、このやり取りを次のように説明しました。( a )・( b )に入ることを、aは十五字以内で、bは二十五字以内でそれぞれ考えてあげてはめ、文を完成させなさい。( )・( )は字数に数えます。

ケンちゃんが「( a )」と聞いたのは、ケンちゃん自身、( b )」と聞いていたからだ気づいたフミは、その心配がないことを、本人の気持ちを代弁するように伝えたのであった。

問十 ——線部⑦「いまのナイショね、しーっ、しーっ、と口の前で人差し指を立てた」とありますが、ケンちゃんこの行動について、フミはどのように受け止めていると考えられますか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 自分と打ち解けたことから出た冗談じょうたんで、本心でそう思っているわけではないと思っっている。
- イ 今まで隠してきた気持ちを二人だけの秘密にして、自分と仲良くなりたいたのだと思っっている。
- ウ 誰かに聞いてもらいたかった本心であるが、母を悲しませたくはないのだろうと思っっている。
- エ 冗談にしたものの、自分以外の人に本当の気持ちは聞かれないのだろうと思っっている。

問十一 ——線部⑧「ケンちゃんはその鬚かみひげを振り払って……シートシートの小さな糸くずをつまみ上げる」とありますが、このときのケンちゃんの気持ちを、四十字以内で考えて答えなさい。( )・( )は字数に数えます。

問十二 ——線部⑨「フミの胸の中で、また、ゆっくりと潮が満ちはじめた」とありますが、この時のフミの気持ちを説明したものとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 海岸でのことを思い出し、その時の母をまねて深呼吸をしたところ、家族に対する気持ちが母と同じであったことに気づき、感情の高まりがおさえられなくなっている。
- イ ケンちゃんの幸せそうな様子を自分の幸せと重ね合わせ、家族との新しい関係を踏ふみ出した時と同じように、あたたかい思いがこみ上げようとしている。
- ウ 満ち引きをくり返す海のように不安であったが、猫までも家族の一員として扱あつかってくれるケンちゃんのやさしさにふれて、感謝の思いでいっぱいになっている。
- エ 自分より年下のケンちゃんに家族の愛情を教えるつもりであったが、逆に家族の大切さを教えられ、そのぬくもりで胸が満たされようとしている。
- オ 家族への思いをケンちゃんと共有したことで、海水浴でしか感じられないつかしい気持ちを思い出し、目に浮うかべていた涙がこぼれそうになっている。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(I)・(II) は段落番号です。)

I コミュニケーションのおもしろさは、知らないうちにお互いの癖を味わい合っているところにある。情報伝達だけがコミュニケーションの目的ではない。「A」、生身の身体から発せられる癖を自分の身体で受け止め、投げ返す。そこに醍醐味がある。

たとえば普通の会話が「漫才」に似るときがある。片方が「ボケ」をやり、もう片方が「ツッコミ」を自然にやっているケースだ。夫婦でも、こうした漫才のような役割分担ができている場合がある。当人は漫才と意識しているわけではなくとも、周りから見ると楽しめる。大阪では、幼い頃から日常会話でボケとツッコミの訓練をしているようだ。これはもはや技の域に達している。片方の癖に対してもう片方が癖で対応する、というコンビネーション・プレーがうまくいくと気分がいい。

たとえば女子中高生同士の会話は、会話の内容以上に、会話の癖を共有するところに特質がある。十代の女の子特有の話し方の癖をマスターしなければ、会話に入りにくい。職業によっても会話に癖が出てくる。教師生活が長いと、どことなく教師臭さが話し方から抜けてなくなる。私の知っている例では、予備校の古文の先生が妙に女言葉を使うので不思議に思っていたら、本務校が女子大ということであった。女子大生の言葉づかいの癖が自分に乗り移ってくる。あるいは彼女たちにわかりやすく説明するために、自然に同調しているのだ。昆虫は、捕獲されないように「擬態」を使うことがある。木の葉に似せた形に自らを徐々に変えていく。言葉にも「擬態」という技があるのではないか。会話の癖を身体に取り込むことで、仲間に入るのである。

癖は習慣である。意識的なものではなく、やめようと思っても簡単にはやめられない。その点が技とは違っている。技は出すべき時に出すものである。状況に応じてコントロールでき、しかも効果的であることが技の条件である。コミュニケーションには、そうした「技」の修練も必要なのだ。しかし、皆が会話上手になることだけがいいわけではない。ビジネスの場面などでは効率性が要求されるので、コミュニケーションは上手であるほどいい。しかし、日常生活では、上手い下手よりも、会話の癖をいかに味わい合うことができるか、ということが「A」重要になる。

ゆっくり言葉を探す癖の人がいる。そのテンポにイライラする人は、その癖を味わってはいない。ああ、また言葉を探しているな、と感じ取り、その言葉探しの時間を「B」待つ。そうできる人は、相手の癖を楽しむに変えているといえよう。

谷崎潤一郎に「幫間」という短編がある。本来は旦那衆の身分にある桜井という男が、自ら進んで太鼓持ちになる話だ。太鼓持ちは旦那衆におべっかを使い、ヨイシヨする。腰が低くて、もみ手してへつらう身体でなければ太鼓持ちとは言えない。話し方も太鼓持ちらしい癖を味として出す必要がある。「くでげすな」といった、いかにも太鼓持ちらしい言葉づかいを身につけることで、他の人と距離感をつくっていく。桜井がこうした話し方をわざとすることで、周囲も彼の取り扱ひ方に慣れていくのだ。

話し方の癖は、生き方のスタイルと関係している。言葉は意味を伝えるためのものだけではない。言葉を発する身体が乗り移っている。他者との距離の取り方が、言葉の端々にあらわれる。逆に言えば、言葉の端々から、その人の対人関係の癖を見抜くのが、コミュニケーション力である。

ではここで「話し方の癖を見抜く」練習問題をやってみよう。テキストは、夏目漱石の『坊っちゃん』(岩波文庫)。国民的な小説だが、読んだことのない人のために一応の人物紹介をしておく。江戸っ子の坊っちゃん、坊っちゃんをかわいがる婆やの清、赴任した松山の中学校の生徒、中学校の同僚で一本筋の通った男気のある会津出身の山嵐、大学出の文学士で気取っている策略家の赤シャツ、赤シャツにおべっかを使う野だいこ、表向きの言葉は立派そうだがあまり中身の無い話をする校長の狸、坊っちゃんが下宿している家の世間話が好きな御婆さん。次に引用する言葉は、状況はバラバラだが、それぞれ誰の言葉だろうか。

「学校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡徳の致す所で」

\*「まだ御存知ないかなもし。こちらであなた一番の別嬪さんじゃがなもし」

\*「籠棒め、イナゴもバッタも同じもんだ。第一先生を捕まえてなもした何だ。菜飯は田楽の時より外に食うもんじゃない」

「そりや、イナゴぞな、もし」

「あの松を見給え、幹が真っ直で、上が傘のように開いてターナーの画にありそうだね」

「全くターナーですね。どうもあの曲り具合つたらありませんね。ターナーそっくりですよ」

「あなたは真っ直でよい御気性だ」

「貴様らは奸物だから、こうやって天誅を加えるんだ。これに懲りて以来つつしむがいい。いくら言葉巧みに弁解が立っても正義は許さんぞ」

ストーリーを詳しく知らなくとも、およその見当が言葉づかいからつく。それが癖というものだ。解答は前から順に、校長、下宿先の御婆さん、坊っちゃん、中学生、赤シャツ、C、D、E。言葉づかいの癖から、気質や話すテンポ、場合によっては仕草までを思い浮かべることができる。

黙読よりも音読の方が、言葉づかいの癖を見抜く練習になる。自分の身体に一度言葉を通してみることで、癖がわかる。小説の場合、会話文が上手いかどうかは、音読してみればわかる。言葉づかいの端々にその人物の癖が感じられれば、その人物はリアリティがあるといえるのだ。

II 対話力や表現力を養うために、演劇は大きな効果がある。気持ちをしつかり表現しようという構えにセットすることで、表現する意思自体が鍛えられる。演劇は、基本的に他者から見られることを前提にしている。観客のまったくい演劇は、演劇とは言えない。第三者に見られているという意識のもとで、自分がいかにも内側からわき上がる感情に満たされているように話す。これは難しい技術だ。自然さが失われやすい。

それだけに、演劇の練習で鍛えられた人は、人目にさらされた場での度胸が据わっている。他者の(それも多くの)目を受け止める芯の強さが、身体の中に軸として生まれる。世阿弥の言う「離見の見」は、観客側から見える自分の姿を役者が意識するということだ。自己を客観視する力である。自分の雰囲気肯定する力とともに、自己客観視する力が、演劇という状況では鍛えられるのだ。

とはいえ、私たちは日常的に劇をする機会が少ない。私たちにふだん必要なのは「演劇的身体」である。たとえば、数十人、数百人の前でスピーチをしなければならぬとする。この場合には、日常を生きている身体よりもずっとテンションの高い身体が要求される。

これはもはや一つの演劇だ。「自然な自分」「素の自分」のままがいいと思っても、ステージの上ではそれだけでは不十分だ。見る人間のエネルギーを身体に引き受けて、それを跳ね返すくらいに「張り」が身体に求められる。目が泳いでしまい、身体に中心がないくぐにやりとした状態では、見ている方が辛くなってしまう。テンションを上げ、しかも自分を冷静に客観視できる力——この力のコ

⑦ントロールが演劇的身体を支えるのだ。

人はいつも同じモードでコミュニケーションしているとは限らない。仕事になれば仕事用のモードになる。コミュニケーションの仕方、仕事モードになる。プライベートで友達と話す感じをそのまま仕事に持ち込んでしまえば、相手に失礼になってしまう。プライベートモードと仕事モードの二つは、少なくともチェンジできるようにしておくことが必要だ。このモードチェンジができる身体のことを、ここでは「演劇的身体」と呼びたい。常に「本当の自分」でいることはできない。生活のさまざまな文脈の中で「……として振舞う」というのが現実だ。そのさまざまな「……として」の束が自分になる。

力が内側から充ちていけば、力を抜くこともできる。身体のエネルギッシュを、状況や役柄に合わせず勝手にしなやかにコミュニケーションしていくために、まず必要なのは、身体の内側にあふれているエネルギッシュだ。 (齋藤孝『コミュニケーション力』)

\*太鼓持ち…人の機嫌きげんとりをすること。 \*寡徳…徳の少ないこと。 \*範棒べらぼうめ…相手ののしつて言うことば。 \*田楽…豆腐を串くしにさして焼いた食べ物。

\*ターナー…イギリスの画家。 \*奸物…悪知恵がはたらく者。 \*天誅…天のくだす罰。

問一 【A】(二カ所)に入ることばとして適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。  
ア とくに イ むしろ ウ ずっと エ かりに オ いわば

問二 ——線部①「彼女たちにわかりやすく説明するために、自然に同調しているのだ」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 生徒の言葉の持ちようを意識しすぎて、知らないうちに自分の説明の仕方を見失っているということ。
- イ 生徒の言葉の持ちようが無意識のうちに影響を受けて、教え方そのものに変化が見られるということ。
- ウ 生徒の言葉の持ちようを無意識のうちに取り込み、相手にとって身近な表現で説明しているということ。
- エ 生徒の言葉の持ちようを意識して使うことで、話す相手の気持ちに寄りそおうとしているということ。

問三 ——線部②「コミュニケーションには、そうした『技』の修練も必要なのだ」とありますが、ここで「技」とはどのような能力を指していますか。適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 誰とでも会話を盛り上げることができる能力。 イ お互いの思いを理解し合うことのできる能力。
- ウ 相手の会話に自然と合わすことのできる能力。 エ 自分の意思でいつでも使うことのできる能力。

問四 【B】にあてはまることばとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア イライラしながら イ 遊びながら ウ 味わいながら エ とまどいながら オ 眺めながら

問五 ——線部③「話し方の癖は、生き方のスタイルと関係している」とありますが、なぜ、このように言えるのですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア その人が話す言葉には、伝えたい内容だけでなく、相手とのつきあい方が表れるから。
- イ その人が話す言葉には、伝えたい内容だけでなく、相手との距離を広げる役割があるから。
- ウ その人が話す言葉には、伝えたい内容だけでなく、人柄や職業がにじみ出るから。
- エ その人が話す言葉には、伝えたい内容だけでなく、表現の仕方に違いが見られるから。

問六 C E には、||線部1～8の人物名が入ります。あてはまる番号をそれぞれ答えなさい。

問七 ——線部④「自分の身体に一度言葉を通してみることで、癖がわかる」とは、どういうことですか。(a) (b) (c)に入る適当なことばを、本文Iからa・cは五字、bは二字で探し、文を完成させなさい。( )。「」は字数に数えます。

小説の人物に(a)が感じられるのは、会話を(b)した時に、(c)から人物の癖が読み取れるときだということ。

問八 ——線部⑤「これは難しい技術だ」とありますが、演劇ではどのような力が求められるから「難しい」のですか。「力」に続くように本文から十字以内で探し、書きぬきなさい。( )。「」は字数に数えます。

問九 ——線部⑥「これはもはや一つの演劇だ」とありますが、多くの人の前でスピーチをすることをこのように言うのはなぜですか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 気持ちをしつかり表現できる芯の強さを鍛えることは、演劇において役者が意識することと同じであるから。
- イ 見る人間のエネルギーを身体に引き受けて跳ね返し、自分を冷静にとらえる力は演劇で鍛えられるものだから。
- ウ コミュニケーションをとるための「張り」が身体に求められるのは、まるで演劇を見るときのようなものであるから。
- エ 仕事になればコミュニケーションの仕方も仕事モードになり、演劇のようにプライベートを持ち込めなくなるから。

問十 ——線部⑦「人はいつも同じモードでコミュニケーションしているとは限らない」とありますが、筆者はさまざまな文脈の中でどのようにコミュニケーションをしなければならぬと述べていますか。解答らんに続くように、本文IIから五字以内で探し、書きぬきなさい。( )。「」は字数に数えます。

問十一 本文に書かれている内容として正しいものを次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。  
ア コミュニケーションのおもしろさは普通の会話でこそ味わえるため、「漫才」のように役割分担をしすぎると楽しめない。  
イ 気がつかないうちに「漫才」のような会話をしているとき、コミュニケーションのおもしろさを体験しているといえる。  
ウ ゆっくり言葉を探す人だけでなく、そのテンポを不快に思いつつも待つことのできる人は「癖」を楽しめる人である。  
エ 人は常に「本当の自分」でいることができず、身体の内側にエネルギーがみちていけば、力を抜くこともできる。  
オ 身体モードチェンジができる人は、力をたえず入れ続けることができるため、コミュニケーション能力も高くなる。

三 次の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- ① 文化祭の舞台のソウチを工夫する。 ② 食品を倉庫にチヨゾウする。 ③ 本堂の仏像をオガむ。
- ④ リンジ列車が運行される。 ⑤ 電車のウンチンが改定された。 ⑥ 音楽会に向けてガツソウの練習をする。
- ⑦ オークストラをシキする。 ⑧ 養蚕や製糸業で栄えた。 ⑨ 穀物を輸入する。
- ⑩ 地域のボランティア活動に奮って参加する。

問一

問二

問三

問四

問五 A

B

問六

問七 (1)

(2)

問八

問九 a

b

問十

問十一

問十二


問一

問二

問三

問四

問五

問六 C

D

E

問七 a

b

c

問八

力。

問九

問十

コミュニケーションしなければならない。

問十一

三

	⑨ 穀物		⑤ ウンチン		① ソウチ
	⑩ 奮		⑥ ガッソウ		② チョゾウ
つて			⑦ シキ		③ オガ
				む	
			⑧ 養蚕		④ リンジ

受験番号
<input type="text"/>
得点
<input type="text"/>

問一 エ  
問二 ア  
問三 イ  
問四 ウ

問五 A  
エ  
B  
ウ  
問六 エ  
問七 (1) ウ  
(2) イ

問八 イ

問九 a  
き ど  
か っ  
ち の  
お 母  
母 さ  
ん が  
好 b  
な の お  
い こ 母  
か と さ  
が ん  
好 は  
き 自  
な 分  
の よ  
で り  
は 妹

問十 ア

問十一  
お 母  
さ ん  
を 妹  
に と  
ら れ  
問十二  
イ

を	お	た	お
大	さ	く	母
切	え	な	さ
に	て	い	ん
思	、	と	を
う	兄	い	妹
気	と	う	に
持	し	思	と
ち	て	い	ら
。	妹	を	れ

問一 イ  
問二 ウ  
問三 エ  
問四 ウ

問五 ア  
問六 C  
6  
D  
2  
E  
4

問七 a  
リ  
ア  
リ  
テ  
イ  
b  
音  
読  
c  
言  
葉  
づ  
か  
い

問八 自  
己  
を  
客  
観  
視  
す  
る  
力。  
問九 イ

問十 し  
な  
や  
か  
に  
問八 (別解) 自己客観視する(力)  
コミュニケーションしなければならぬ。  
問十一 イ  
エ

三

① ソウチ	⑤ ウンチン	⑨ 穀物	① こくもつ
② チョゾウ	⑥ ガツソウ	⑩ 奮	ふるつて
③ オガ	⑦ シキ	指揮	
④ リンジ	⑧ 養蚕	ようさん	
装置	貯蔵	合奏	
臨時	拝む		

受験番号
得点